

小幡道昭 (2009)『経済原論: 基礎と演習』東京大学出版会.

序論 (pp.1-18.)*

担当：岸本康佑**

0.1 経済原論の対象

歴史的社會

経済原論(経済学原理論)とは

モノの生産, 分配, 消費を意味する「広義の経済」全般を対象とするわけではない
対象とするのは, 時代を遡ればどこかに出発点をもつ「歴史的」¹な社会
⇒ 資本主義と名付ける
∴経済原論とは, 「資本主義とは何か」を理論的に答える学問

発展段階

資本主義は「変容」²する

資本主義は時代ごとに大きな節目を持ち, 段階的に発展(重商主義, 自由主義, 帝国主義の三段論)

「重商主義段階」³

重商主義・・・一国を富ませるもとは対外貿易のプラス分だとする経済思想

資本主義の起源

- ①16-17 世紀の西ヨーロッパの商業の活性化
 - 地中海貿易を支配したイタリア都市国家の繁栄
 - 大航海時代にはスペイン・ポルトガルが世界交易を主導

* 本文の太文字はカギ括弧で括り, レジューメの本文や注に定義を載せた.

** 東洋大学経済学部経済学科.

s12102301404@toyo.jp, kishimoto.research@gmail.com

¹ 時代を区切って, それぞれに固有な社会のあり方を捉えるアプローチ. 「時代別の」に近い意味.

² 規模が拡大するとか, 領域が広がるではなく, 全体の状態が変わること.

³ 資本主義が発生した時代全体.

オランダが独立して海上貿易と金融で覇権を握る。

最終的にイギリスがその地位を継承し、商業的富をもとに産業資本主義へと発展

②市場の浸透・拡大とプロレタリアートの形成

16～17世紀のイギリスでは、商業的農業が発展

借地農業者が賃金労働者を雇って大規模農業を行い、生産力が急上昇

毛織物産業の発達は羊毛需要を高め、耕地の牧羊地への転換を促した

その過程で賃金労働者(プロレタリアート)⁴が大量に形成

資本主義は近代的な国民国家の形成と連動

∴プロレタリアートの抵抗に対して、既存の制度や慣行を打破する国家の強制力が不可欠

「市場に任せるほうが効率がよいから、市場は自然に浸透・拡大する」は不正確

自由主義段階

イギリスは綿工業をベースに機会化し、生産が大幅に増加(産業革命)

⇒ 労働者の熟練を排除し、単純労働を組織化して大規模化(工場生産体制)

⇒ 市場中心の経済社会に

⇒ 国家の介入を排除し、自由貿易・自由主義へ(「安上がり政府」「夜警国家」「自由放任」)
国家に助けられて成立した資本主義の経済は、国家の介入や規制を今度は不必要な遺訓として斥け、そこから離脱する傾向を示すようになる

帝国主義段階

19世紀、イギリスに遅れてドイツなど後発資本主義国が台頭

イギリスは綿工業を基軸とした自由主義の資本主義

⇔ 後発資本主義国では巨大企業が成立、個別資本の競争に代わり独占的に組織された市場が支配的に

高い生産力を誇る巨大企業の周辺には、中小企業や小農経営など旧来の産業が温存(二重構造)

⇒ 国内市場の広がりには限界があり、植民地を求め対外進出

⇒ 第一次世界大戦

帝国主義とは、狭義には列強の植民地争奪、広義にはこうした動きを生み出した資本主義国内の変容全体を意味する

19世紀末から第一次世界大戦の時期を古典的帝国主義の段階という

⁴ 農地など生産手段を持たず、雇用され賃金で生活する労働者。

第一次世界大戦後の資本主義

20 世紀を通して、資本主義は古典的帝国主義の傾向が強化

そもそも福祉国家体制は、限られた国民を対象にしてはじめて可能

⇒ 国民経済を高い障壁で囲い込む

19 世紀末までの資本主義は、イギリスを中心に「純化傾向」⁵が進み、「純粹資本主義」⁶になる

⇒ ドイツなど後発諸国の資本主義化は、財政や金融制度、組織や制度に依存(Ex. 軍国主義, 福祉国家)

「グローバリズム」

福祉国家の危機, 「ネオリベリズム(新自由主義)」が強まる

新興資本主義諸国(中国, インド, ブラジルなど)の台頭

⇒ 資本主義の大転換

グローバリズム ≠ ネオリベリズム

ネオリベリズムが, 新興資本主義諸国の発展を生み出したのではない

新興諸国の発展がグローバリズムを推進し, その帰結が先進諸国のネオリベリズム

⇒ 先進諸国のネオリベリズムが変質しても, グローバリズムは終わらず, 福祉国家に戻ることもできない

後発国は資本主義化の時期に応じて異なるタイプの資本主義を生み出し, それが先進国に反作用することで, 資本主義の発展段階が画される

⇒ 資本主義の拡張の歴史を, 純化・不純化では考えられない

⇒ 変容こそが資本主義の本質

0.2 経済原論の方法

変わる力と変える力

資本主義は, 「変わる力」を内包すると同時に, 外部から「変える力」が作用

メタ・モデル

資本主義の原理論は, 自然科学のアプローチではうまくいかない

⁵ 自由競争を妨げる制度・慣習・法規制などを廃止し, 市場による経済編成に一本化してゆく傾向。「純粹化傾向」ともいう。

⁶ 市場原理だけで編成された資本主義本来の状態。

原理論は、単一の理論で複数の状態を説明するモデル

= 複数のモデル間に関連付けるメタ・モデルが必要

トータル・モデル

資本主義の変容は、経済社会の部分を取り出しても捉えられない

⇒ 部分と部分に関連付けるようなトータル・モデルが必要

トータル・モデルは、個に還元できない関係の束(=「全体」)である

階層モデル

上位の領域はいくつかの下位の領域で構成されている ⇒ この上下の区別を「層」という
下位の領域から上位の領域へと層が積み重なって層が構成されるモデルを階層モデルという

メカニズムとシステム

「メカニズム」

機械仕掛けの装置のようなもの

単純な動きだが、組み合わせによっては予想を超えた複雑な動きをする

Cf. ルネ・デカルト

しかし、メカニズム論では説明できない現象が存在 = 「システム」

全体・状態・内部と外部

システムには、部分の単純な合成には還元できない全体が存在する

全体は単純な部分の集まりではなく、階層的に組織されたもの

全体には外部とのやり取りがある

システムには内部と外部の区別を持ち、その内部では自動制御が働いている

0.3 経済原論の構成

体系と構造

「体系」

システムと同じ意味

システムに対する理論は、体系として展開される。

形式的な表現様式の問題ではなく、対象としてのシステム全体を捉えるための分析方法の問題

「構造」

小さなもの同士の関係が束となり，さらに束同士が関係を作ること

二層構造

性質の異なる 2 つの構造が結びついたものとして全体を捉えること

経済原論の大構造は市場と社会的再生産

論点

- ① p.2「経済原論が対象とするのは、時代を遡ればどこかに出発点をもつ、歴史的社会的なものである。ここでそれを、さしあたり「資本主義」と名付けてみる.」
傍線部の論理的が分からない。
- ② 国家の政策的な介入を排除する自由主義段階において、「プロレタリアートに対する国家の強制力」は必要なくなったのか？もしそうならなぜか？
- ③ p.5「しかし、高い生産力を誇る巨大企業の周辺には、中小企業や小農経営など旧来の産業が温存され、二重構造を形作っていた。このため、国内市場の広がりには限界があり、新たな植民地を求め対外的な進出が不可避となる.」
傍線部の論理的が分からない。